

GRAVITY

“グラツェ”

“グラツェ”とはイタリア語で“ありがとう”の意味。陽気なラテン民族の言葉に倣って、素直に感謝の言葉を口にできる明るい場作りを、本学科は心がけています。

特集 入学して半年がたった1年生に聞きました。

What feeling?

大学生活ってこんな感じ!

いろいろ噂には大学のことを聞くけれど、でも実際やってみると、高校とは何が違うのよ? で、明星の国際コミュニケーション学科の大学生活ってどんななのよ? それをズバリ、1年生に聞いてみました。

① 高校と違うのはどんな感じ?

T:自分が動けばとどん**世界が広がる**のが大学のすごさ。この学科はそういうチャンス(イベント)をいろいろ用意してくれているから、それに参加するだけで出会いの幅が広がるし、視野が一気に広がる。

K:その分、大学って自己管理が難しいよな。単位を落とす欠席回数も決まっちゃってるから、逆にそこに甘えちゃったり。

E:管理してくれる人がいないってことは、自分がしっかりしていないと簡単にさげられる。確かにしばらくすると、こななくなる人もちらほら。

T:大学って、みんなそれぞれスケジュールが違ってライフスタイルが違うからね。時間が個々人によってフレキシブルってところが一番違うと思う。

M:先生も何も言わないから、うっかりしてると簡単に単位だって落とす。

T:そうだね。いろんな意味で、とにかく**“自由”**。高校だと先輩後輩みたいな縛りがあったけど、大学は、人と人が先輩・先生も含めて、全員対等な、大人の付き合いができる。その上、この学科のイベントは実社会とつながってるから、それに参加すると高校の時より責任が重くて、充実感がある役割を担えるよ。

② 国際コミュニケーション学科の仲間たちはどんな感じ?

K:普通に**“ハーフ”**がいっぱいいる(僕もですが)から驚いたよね。

E:だからかなあ、お互いにめっちゃ**親近感**が湧く。僕も片親が外国人だから、どうせ勉強するなら自分に近いことをやりたいと思って見つけたのがここ。

M:それと関係あるのかな、個性豊かな人が多いなって感じる。服も髪型も。でいて、性格はアクティブ。他学科の友達からも、この学科はなにか違

うって言われたし。多趣味の人が多くて、とってもフレンドリー。

E:それは学生だけじゃなくて、先生もそう。先生も大学になると学生と距離を置いているイメージだったけど、**ここは違ってた**。先生と生徒の距離がすごく近い。僕はみんなで野球サークルを立ち上げたんだけど、その時にも先生が顧問になってくれた。やりたいことを言えば手伝ってくれる先生の姿勢が超うれしかった。社交的なタイプが多いみたいで、他学科からは「みんな仲がいいよね」って憧れられてるよ。

③ 授業はどんな感じ?

E:高校と違って、授業も大学では縛られてる感が少ない。

M:うん、自分が**好きなことを勉強**できるのは醍醐味。

K:けど課題が多い(笑)。理系なんて一日4つあるらしいけど、この学科なら、緩そう(笑)。

T:確かにレポートは難しいよね。大学に入ったらいきなりだもん。

E:外国人の**先生が面白い**よ。授業が遊び感覚で、先生とのゲームに勝つと、早めに切り上げてもらいよって言うってくれるから、思わずのせられて頑張っちゃう。日本の先生は怒る時も礼儀正しいけど、海外から来た先生は一言、下の名前を名指して「うるさい!」。外国人の先生はいろんな国をまわっている経験豊富な先生が多いから、発想も柔らかくて幅がある。学科にいただけで異文化交流を楽しめるよ。

M:そうそう、オーストラリア出身の先生とニュージーランド出身の先生とでは、英語自体が微妙に違うという部分も含めて。この学科は積極的な人が多い分、授業が**とっても活発**。なんてたって“コミュニケーション学科”だから、静かに黙ってる人がいても、先生が黙らせておかないから(笑)。

E:しかも、日本語がまったくわからない外国人の先生もいるから、たまに海外旅行してる気分になる時もあるよ。でもそれが逆に**プラス**になっていて、なんとか話をしようって単語を覚えるから、語学が自然にかなり身につく。

T:外国人の先生たちって、「すごいね!」みたいな明るいノリでオーバーリアクション気味に反応してくれるよね。

E:うん、それで思わずやる気が出る(笑)。学科主催の異文化に触れられるイベントは楽しいよ、サマースクールとかEnjig*とか(*ガーナのストリートチルドレンに希望を届けるために、卒業生らがきっかけとなって始められたチャリティイベント)。しかもイベントは先生が旗を振って箱は用意してくれるけど、あとは自分たちでやりなさ



<http://www.meisei-u.ac.jp/dpt/International/>

って感じだから、責任重し。

T: 私なんて、ずーっと英語が嫌いだったけど、サマースクールに参加して、語学学習は『**習うより慣れろ**』なんだなって気付いてから変わった。SVOの文法から入ると苦しいけど、もっと気楽でいいってわかってから、英語が大好きになりました。それも、高校までは受け身だった自分が、サマースクールに参加して初めて教える側にまわって、そこでどうやったら子供たちが楽しく英語を学べるだろうって考えたからなんだよね。

A: 授業の中でもコミュニケーションの授業は私のお気に入り。例えば自分はこう思うけど、相手はこういう風な違う感じ方をしている、それを論理的に分析する授業があるんです。人とのコミュニケーションはまず**自分自身を知る**ことから、みたい。だから授業を通して自分のことがわかるばかりでなく、相手のこともわかるようになる。それが本当に面白くて、休めない(笑)。

T: それ英語だけじゃなくて、中国語を通して学習できるのも、この学科のいいところ。使えないものは意味がないから、とにかく実践で**コトバを使おう**ってスタンス。

T: あと大学全体のことだけど、他大学にない“学生支援センター”が超オススメ!自分だけ授業についていけなくなっても、私塾感覚で個人的にスタッフが勉強を教えてくれるんだよ。



? 普段の生活はどんな感じ?

E: 俺は親元。カラオケ屋で時給900円で週一から週三でバイトして、そこから携帯電話代を払い、あと車の免許取った時のお金を親に返す生活。

T: 私も実家だけど、家が遠くて毎日2時間かかるので、高校の時よりも睡眠時間が減って、一日5時間くらい。移動の時間が**もったいない**と、車内で勉強するようになってからは、その時間が楽しくなりました。

K: 僕は一人暮らし。今までは家に帰ったら普通にご飯が出てきたのに、それがいないから、ちょい辛い。俺は生活費、つまり食事代と携帯代と小遣い(家賃以外)で6万くらいを自分で稼いでるよ。

M: 私も一人暮らし。ラクロス部の朝練で、朝4時半か5時には起きて、まず家事をやって空いた時間に終わってない課題を済ませて、6時半には大学にあって生活が最初は大変で、よく具合が悪くなっていた(笑)。さらに今、トレーナーの資格をとりたくてその勉強もしてるから、部活と資格勉強と授業と一人暮らしを平行させているの

で、とにかく時間がない。

A: 確かに忙しいけど、初めての一人暮らしは**とっても楽しい!** 大学へ来る1時間前に自分で決めたノルマがあって、掃除して洗濯してご飯作ってお弁当つめて家を出る。そして昼休みに家に帰って布団と洗濯物を取り込んで、ご飯を食べてまたキャンパスへ。それが私の毎日のゲーム(笑)。

M: Aちゃんとは自転車で一分のところに家があるから、時々ご飯一緒に作ったりして、一人暮らしは一人暮らし同士で助け合ったりしてるよね。

A: 二人で卒業旅行でオーストラリアへ行こうって目標があるもんね。パン屋さんで時給950円でバイトしてるけど、今、体育会系空手部で夜練で頑張ってるから、なかなか授業の課題が追いつかないのが悩み。

? キャンパス設備はどんな感じ?

A: これはもう自慢の種! 移動が15分じゃ足りないこともあるくらい広さ。しかも新しくオシャレだから、TVドラマにもよく使われてるよね。

E: うん、他大学の友達も驚いてた。駅から濡れずに校舎までこられるし、ラウンジもいたるところにあって、**のびのび**できるよね。

A: 学食もおいしいよ。

E: そういやうちら、学食でもいつも仲良く、みんなでご飯食べてるな(笑)。

? 近い夢、遠い夢、どんな感じ?

E: 若者の海外離れとか言われてるけど、うちの学科に来た人は留学目的の人が多。それは結構な**共通点かも**ね。

A: うん、留学で単位が取れるのがこの特徴だからね。半年ってところは結構あるんだけど、一年も行かせて単位をくれるところは少ないから。

E: 行きやすい環境を先生たちが作ってくれてるのが強み。この学科は**留学しやすい**んだなって感じて入学してる友達も多いよ。

M: 留学ももちろん夢だけど、卒業後のことで言えば、私の場合、大学に入ってから夢が定まった。高校の時から海外と関わる仕事に就きたいと思ってはいたんだけど、大学に入ってからいろんな情報を仕入れて、今はアメリカのトレーナーの資格を取りたいと思ってる。栄養から筋肉、リハビリ、骨などに関するありとあらゆる知識が必要で、めちゃくちゃ難しいんだけど、とりあえず目標はそこ一本。スポーツ大好きだから。

E: 僕は小学校から高校卒業まで野球をやっている、進路を決める時に国際系と野球系の両方



を兼ねる仕事は何かないかと考えた。そしたら高校の先生が、「だったら日本に来る外国人選手とか、日本から海外に行く選手とかの通訳を目指したら?」と言ってきて、この学科の面接官だった先生にそれをそのまま伝えた。そしたらその先生が「やってみなよ!この学科だったらそういう勉強もできるよ!」ってポンッと**背中を押してく**れたんだよね。だから今はとりあえず、それを目指してます。

? 学科に向いてる人ってどんな感じ?

T: チャレンジ精神旺盛な人。この学科で用意されているたくさんのイベントに積極的に参加すればするほど、いろんな道が拓けていくから。強制じゃない分、**自分でやりたい**という気持ちがある人にはとってもいいです。

A: 私もこの学科がコミュニケーションに重点を置いていたから、ここに入學した一人なんだけど、英語を教えてくれるところはたくさんあっても、それをコミュニケーションに絡ませて教えてくれるところって、意外と少ないんだよね。だから英語をコミュニケーションに絡ませて教えてくれることを希望する人には、絶対この学科!

E: ほんと、大学生生活、楽しいよ。



明星の国際コミュニケーション学科に入って良かったと、十二分に大学生活を満喫し、生き生きとしている5人からのメッセージ。
『高校生の皆さん、ぜひぜひ私たちの仲間になってね!待ってるよ』

こんなことがありました！

4月
▼
9月 編

今年も新一年生と共に オリエンテーションキャンプへ



桜が見頃の満開を迎えた4/5・6、毎年恒例のオリエンテーションキャンプが明星学苑八ヶ岳山荘にて開催されました。

本学科らしく、『非言語コミュニケーション』に基づいた楽しいゲームが組み込まれているのが、このオリキャンの特徴。「授業だけだとなかなか交流の機会も持てないけれど、それをきっかけに知らない人とも話すことができた」「先生がこんなにフレンドリーだったとは意外」というのが新入生の感想。(財)キープ協会のレンジャーたちと森に分け入った『My 箸づくり』も行われ、“さりげない作業”を通じた自然な交流をできたことが新入生にも好評でした。

中でも一番盛り上がったのが、先輩と教員らによる創作喜劇。上海師範大学に留学していた学生Oくんが、さんざん迷った末に留学し、結果、自信がつき新しい自分を見つけて、将来は起業したいと思うようになった過程が劇で紹介され、同じく中国に留学を考えている女子学生は「こうやって実際に私が目指す道を経た人の話を聞くと、勇気が出ます」と言っていました。

新1年生の保護者対象、 学科初の『保護者会』開催

5/30、新一年生の保護者の皆様にご来校頂き、学科の説明、および大学生活につ



いてのガイダンスが行われました。

保護者の方をキャンパスにご案内するというイベントは、学科初の試み。これまでは入学された学生の皆さんとのコミュニケーションのみに重きを置いてきましたが、学生の皆さんのより良い進路、そして充実した学生生活のためには、保護者の方々とも力を合わせる必要があるという学科の方針のもと、任意参加で行われました。約30%の保護者をご来校、うち3分の1はご両親揃っての参加。単位取得の方法、卒業後の進路についての説明が始まると、熱心にメモを取る保護者の皆さんが見受けられ、関心の高さがうかがえました。

説明会の後は、保護者の方々対象のキャンパス見学ツアー。眺めが素晴らしい新校舎のラウンジでは「こんな素晴らしい設備の中で勉強ができるなんて、うちの子らも幸せね」と、個性あふれる教員の研究室にも興味津々の様子。

元気で好奇心いっぱいの保護者の皆さんを前に、本学科の教員が逆に励まされた格好となったこのイベントでした。

学科の学生たち主催のイベント “ENIJE”、大盛況



保護者会が行われたのと同じ日5/30、大学構内のシェイクスピアホールでは、新一年生の企画によるチャリティーイベント“ENIJE”が行われました (http://www.geocities.jp/enije_meisei/top.html)。

“ENIJE”とは、ガーナ語で“喜び”や“幸福”の意味。この催しは、本学科の卒業生で現在はタレントとして活躍中の矢野デビットさんが呼びかけ、本学科の1年生が基礎ゼミの“活きた学習”として、企画準備から実現までを担当するという、“体験学習”型のイベントとして開催されました。

矢野さんは、第二の故郷でもあるガーナとを行ったり来たりしながらの生活を続けるう

ち、『ガーナのストリートチルドレン達に夢と希望を与えたい』と思うようになって、今回のイベントを立案。当日は、TVでも活躍中のお笑いタレントが数多く来校し、ガーナ人ミュージシャンによる『ニーテテ (ガーナの伝統音楽)』ライブも飛び出しました。

“日本にいながらにして西アフリカ”といったムードの中、チャリティーは大成功。この日のために、矢野さんが現地から仕入れてきた現地産チョコレートは完売御礼となりました。売り上げ等は直接、矢野さんの手によってガーナの子供達のところまで直に届けられます。

次回開催は12月。詳細情報はどうぞ、ウェブをチェックして下さいね。

『アイヌ民族の歴史と文化を学ぶ』 MUIS学会、7/18に開催

7/18には、MUIS学会 (Meisei University International Studiesの略) としてアイヌ文化に触れるイベントが行われました。駆けつけてくれたのは、弓野恵子さんと、島田あけみさん。お二人ともアイヌの伝統衣装で登場、お話あり歌あり楽器ありで、アイヌ文化の素晴らしさを伝えてくれました。(内容を一部要約、抜粋)

「この世の生きとし生けるもの全てに、それぞれみな役割があり、“カムイ(神)”が宿っているというのが、アイヌの基本的な考え方です」「そういう価値観はアイヌ語にも反映されていて、例えば、日本語での“こんにちは”は、アイヌ語で“イランカラプテ(あなたの心にそっと触れさせて下さい)”。“考える”は、“ヤイコ シラム スイェ(心を揺らす)”。“大地”も“ウレシバモシリ(万物が互いに互いを育てあう場所)”」「アイヌ文化の礎は、自然との対峙です」。

弓野さんのゆっくりとしたしゃべりは雄大な大地を感じさせ、参加者も「なんか普段と違う時間の流れに身を置いた気分です」と会場をあとにしました。



学科の愉快的仲間たち【教員編】

教養深く、学生思いで、個性的な、本学科の教員たち。授業の中だけではなかなか触れられないその素顔をお伝えします。(もっと詳しい記事が見たい方は、明星大学の学科ホームページを御覧下さい)

欲求に素直に体当たり

・張曉瑞



中国が開放されたのは、張先生が中学生の時。「ラジオのスイッチをひねると日本語の放送が聴こえてきて、なんとなくその日本語をぼーっと聴いてました。そのせいか、特に意味もなく日本語が自分に一番近いと思っていました」。大学卒業後に転機が訪れる。西安在住の外国人を案内していた時、日本人の男性と出逢った。「少女時代に聴いていたラジオでよく『中国人民と日本人は良い友だちです』と言っていたんです。私は意味が全くわかってなかったのですが、そのフレーズをそのまま彼に喋ってみました。そしたら彼、ニコリ笑って『ウン!!』。結局その彼が今の夫になりました」。

日本語が全然喋れないまま、来日してしまった張先生は、その後、まさに“体当たり人生”。「中国では女性でも生活を旦那さんに頼るのは恥ずかしいという価値観があるので、私は一生懸命アルバイトを探しました。面接で『私、中国人だから日本語喋れない』と伝えると、面接官は『スーパーの肉切る仕事に、日本語は必要ないよ』って雇ってくれました。だから自然に、『胸肉』『もも肉』という言葉から覚えましたが、日本語を(笑)。日本人は何かをやるうとしてすぐ『これやってもダメなんじゃ……』と考えますが、結構なんとかなるものです」。

すべては“やりながら習得していく”行動派。来日して二ヶ月後には、化粧品売場に転職。さらにいい仕事に就くために、テンプル大学の大学院に入学、英語の教授法を学び直した。それがきっかけとなって、大学院事務室での事務職の仕事を得た。「言葉が勝負の仕事なので、最初は緊張し過ぎて、椅子から飛び上がりそうになりました。けど周りの人の電話対応をよく聞いて真似て、現場でのオン・ザ・ジョブ・トレーニングでなんとか乗り越えました」。

体と感覚で言葉を身につけてきた先生に、言語学習の極意は?と尋ねると、「最も大切なのは、“自信”。それさえあれば、あとはその場の雰囲気や想像で、いつのまにか自然に喋れるようになってます」。ある学生がこっそり教えてくれた。「先生の授業はお菓子もジュースもオッケー。生物の欲求を満たしてからじゃないと、勉強はできないからさそうです(笑)」。

先生の講義のポリシーは、Learning(言語を勉強する)じゃなくて、Acquisition(コミュニケーションの中で自然に言語力を培う)。「勉強だって結局『楽しい』が一番身に付く方法ですから。まずワクワクしなくちゃ」。確かにその力の抜け加減が、いい具合に学生さんたちの学習意欲を刺激しているようにも見えた。

頭で考えるのではなく心で感じて

・高島美穂



小学校を卒業してすぐ、母親の仕事の関係で英国・ロンドンへ。当時はまだ、ヨーロッパでもアジア人が珍しい時代。現地の公立学校へ通い、地元の子供たちに「Hey, Chinese! Ching Chong Chang!」とからかわれたこともあった。「思えば比較文化に興味を持つようになったのは、あれがきっかけかもしれません」。幼少時代から様々な書物が常に手の届くところにある環境で育った先生は、自称“頭でっかちで小生意気な子供”。渡英前に『非色』(有吉佐和子著)を読むなど、人種偏見にも深い興味を抱くようになった。

勉強ができて、お利口さんで、どちらかというと周囲が期待する優等生としての仮面をはずすことができなかった先生が、自分の殻を破ったのが大学時代。「とにかく弾けっぱなし(笑)。サークル(音楽関連)に夢中になり、それまでできなかったこと全てにチャレンジしました。本当に楽しかったな」。

大学卒業後は、フランス外資系銀行の東京支店に勤務。が、もう一度勉強したいという思いが募り始め、28歳の秋に英国のエセックス大学へ留学した。「教育熱心だった母の自分に対する期待が大き過ぎて、私にはそれに答えられないというジレンマが常にあり、どこか自分自身に対してネガティブな気持ちを捨てきれないまま社会人になってしまったところがあった。でもそれを大きく変えてくれたのが、この英国留学でした」。

欧米の教育手法はダメなところを探す減点法ではなく、いいところを徹底的に褒める加点法。「向こうの担当教授が、私が努力した成果を見つけては褒めてくれた。それによって自分に自信が付き、手応えや達成感を味わうことができ、自身を肯定的にみることができるようになりました。得意なことを一生懸命する→成果をきちんと評価してくれる→自信が積み上げられる、この連鎖の中で、初めて自分にゆるがぬ核のようなものが生まれ、それまでのネガティブな自分自身から少しずつ脱皮してゆけました」。

アタマで考えるのではなく、ココロで感じながら生きる。そして周囲で起こりうるすべての事柄を肯定的なサイクルにもっていけば、それは自分自身を愛することにつながり、ひいては他の人をも愛せるようになる、と。「私の場合“人間研究”を突き詰めていったその先に(“イギリス・フランスを中心とした”)文学研究”があったんです」。

学生たちにも「今、やりたいことを思いっきりやりましょう!」と言ってる先生は、日常の小さな出来事さえまるで幼い少女のように目一杯楽しんでいるように見えた。



笠原先生、岩波書店より文庫本『バイロン詩集 イギリス詩人選(8)』を出版

本学科創設時に学科主任を勤め、長きに渡って17~19世紀のイギリス文学の研究を続けている笠原先生が、『バイロン詩集 イギリス詩人選(8)』の編者として、岩波書店より文庫本を出版しました。

笠原先生がこのバイロンの作品収録を手がけるようになったのは、およそ10年前のこと。通常この種の本は短い抒情詩も含まれている場合が多いのですが、収録作品を筋のある物語詩や劇詩など、長編詩を中心に集められているのがこの本の特徴です。

ご興味のある方は、ぜひ御一読を。

Wanted

学生編集スタッフ募集中!

将来マスコミの仕事をした人、またはイラストなどで自己表現をしたい人、記事を書きたい人など常時募集中。企画段階から実際に形にしていって、全てを自分で体験できるので、とてもやりがいがありますよ。積極的な参加をお待ちしています。

これは是非載せて欲しい!の記事&情報大募集

“GRAZIE”は、学生のみなさんと作っていくメディアです。より充実した内容にしていけるために、どんな些細なことでもネタをお待ちしています。

【応募先】〒191-8506 東京都日野市程久保2-1-1 明星大学国際コミュニケーション学科
Tel 042-591-5329 または info-com@eleal.meisei-u.ac.jp まで

【編集スタッフの眩き】

大学の仕事の何が楽しいって、活き活きと学生生活をエンジョイするみなさんの、ルンルンした感じが伝わってくる時。今回の特集はまさにそんな時間でした。後で振り返ればとても短い四年間を、思いっきり味わい尽くして下さいね ■Y